

平岡敏夫

日本近代文学の出発



紀伊國屋新書

A-72

■ 著 者：平岡敏夫

1930年香川県に生まれる。東京教育大学大学院博士課程（日本文学専攻）修了。現在、横浜国立大学助教授

著書：『北村透谷研究』『続北村透谷研究』（1967、1971、有精堂）『日本近代文学史研究』（1969、有精堂）

現住所：東京都中野区上鷺宮5-20-10

日本近代文学の出発(新書A-72)

定価 400 円

1973年9月30日 第1刷発行 ©



発行所 株式会社 紀伊國屋書店

東京都新宿区新宿3の17の7

電話 (354) (代表) 0131

振替口座東京 125575

出版部 東京都千代田区五番町12番地

電話 (263) 4914-5 (編集)

(261) 0857 (営業)

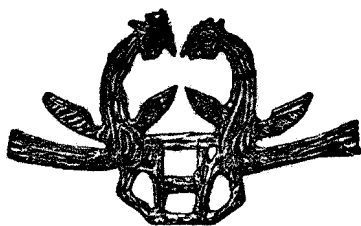
郵便番号 102

印刷 文栄印刷
製本 細沼製本所

落丁・乱丁の弊はおとりかえいたします

日本近代文学の出発

平岡敏夫



紀伊國屋新書

A-72

目次

第一章 ふたつの「文学」……………七

Ⅰ 武士の文学と町人の文学……………七

「精神的革命は時代の陰より出づ」／佐幕派の文学／「時代の陰」と精神的革命／ふたつの「文学」／上の文学／下の文学／「明烏後之正夢」／「春色梅児誉美」／荷風・潤一郎・安吾・色恋のざれごと／人情本の成立・性格／武士の文学と町人の文学

Ⅱ ふたつの「文学」の接近……………二五

武士・町人から国民・個人へ／『西国立志篇』における文学／「学問のすゝめ」／「かたわ娘」の啓蒙と戯作／「当世利口女」と反開化／『柳橋新誌』とふたつの「文学」／「花月社会」と漢戯文／『西洋道中膝栗毛』など／戯作における性的なもの

第二章 政治小説……………四三

Ⅰ 政治小説と近代文学……………四三

ふたつの「文学」の結合／政治と人情本の癒着／自由民権運動・

条約改正運動と政治小説／翻訳小説と小説のイメージ／翻訳物
政治小説／もう一つの近代小説へ

Ⅱ 『経国美談』と『佳人之奇遇』……………六〇

正史と稗史／政治と恋愛／「恋愛」を追いつめる思想／『通俗・
経国美談』との比較／『佳人之奇遇』の私小説性／新しい小説像
／『佳人之奇遇』の「人間」像／『佳人之奇遇』の政治と恋愛

Ⅲ 政治小説と人情世態小説……………六五

政治小説の人情世態小説化／『雪中梅』の小説性／『花間鶯』の政
治と恋愛／明治二十年前後の政治小説／『涙の谷』の意味する
もの

第三章 人情世態小説……………一〇一

Ⅰ 『小説神髓』と『当世書生気質』……………一〇一

人情世態小説／『小説神髓』その写実性と小説性／『小説神髓』と
人情本／「人情」の両面性と逍遙／『当世書生気質』の写実性と小
説性／『書生気質』と『新説小簾之月』／『書生気質』の「人情」

Ⅱ 『当世書生気質』と『浮雲』……………一三七

『妹と背かぶみ』と『浮雲』／『書生気質』と『浮雲』／恋愛と免職／

佐幕派的性格／「恋愛」を追いつめる「志士」

Ⅲ 人情世態小説の系譜……………一五二

『世路日記』の「人情」／その後の人情世態小説／逍遙の「細君」／

硯友社の発足

第四章 ひとつの「文学」……………一五三

Ⅰ 明治二十一、二年の文学……………一五三

逍遙・二葉亭の系譜／『浮雲』と「五月鯉」など／『色懺悔』の創出

／牢獄と女性像／オフエリアの歌／人情世態小説批判の動き

Ⅱ 『浮城物語』論争……………一七九

文学極衰論争／当代文学批判の昂揚／『浮城物語』論争／文学的

近代のイメージへ

Ⅲ 「舞姫」と「おぼろ舟」……………一九三

ユングフロイリヒカイト／恋愛・結婚のイメージ／「おぼろ舟」

のお藤とエリス／忍月と透谷の「おぼろ舟」評／チャスチチと

透谷の文学／鷗外における「国運世態」

揃うて時代の順潮に棹さかすものに非ざりしの一事は当時の史を論ずるものの注目せざるべからざる所なり。彼等は浮世の榮華に飽くべき希望を有せざりき。彼等は俗界において好位地を有すべき望少かりき。

このたたみかけるようなくり返しの文章には、植村正久と同じように、旧幕臣の子弟としてつぶさに辛酸をなめ、少年のころプロテスタントたることによって自己の生きる道をつかんだ愛山自身の姿が刻みこまれている。植村正久・本多庸一・井深梶之助・押川方義らはいずれも明治のすぐれたキリスト者であり、彼らが精神界に残した足跡は大きい、すべて佐幕派の出身であり、薩長藩閥政府のもとでは物質的な榮達の道ははじめから断たれていた。「新信仰を告白して天下を戦ふべく決心したる青年が揃ひも揃うて時代の順潮に棹すものに非ざりしの一事」を愛山とひとしくこの時代の歴史、精神史、文学史を考えようとする者は注目しなければならない。

浮世の榮華や俗界の好位地とは無縁なところで、すなわち「時代の陰」を生きて行つたこれら青年たちこそ、宗教界のみならず文学界をふくめて、精神的革命を目ざしたのである。「日のあたる場所」にいる者、物質的榮達の道が保証されている者にあつては、精神の世界も文学の世界も何ら必要ではない。そこには現実の肯定があるばかりであり、彼は有限の人生を有限にしか生きることができない。「時代を謳歌し、時代と共に進まんとする現世主義の青年が多く戦勝者及び共同趣味の間に出で、時代を批評し、時代と戦はんとする信仰を懷抱する青年が多く戦敗者の内より出でたる」ことに愛山は注目する。文学の存在理由は前者にはけつしてなく、むしろ後者にある。何ゆえ

に人は文学を必要とするかという、文学の本質にかかわる重要な問題がここにはある。

人は、愛山が戦勝・戦敗ということにこだわりすぎていると言うかも知れない。戊辰戦争の勝利こそ明治維新の成就を決定づけたものであり、戦敗の意味などどこにあるかと言う人があるかも知れぬ。維新以後の日本近代を謳歌する人たち、謳歌し得る人たちにとっては、それはそうだろう。私は、日本近代をただ暗黒ひと色に塗りつぶそうというのではない。ただ、薩長藩閥政府に和して時代を謳歌することができないという人たちが存在したということ、そして時代を謳歌する者には信仰も文学も何ら必要ではなかったのだということにまず注目したいのである。

佐幕派の文学

明治文学は佐幕派の文学であるとする意見がある。明治文学をになった人たちの多くは佐幕派出身であるということからくるわけだが、むしろ「精神的革命は時代の陰より出づ」の語が何よりその意味をときあかしていよう。薩長藩閥政府なくしては、明治十年の西南の役に至る多くの反革命を鎮圧して維新を遂行し、日本の近代化を導くことはできなかったろうが、急速な産業資本主義の育成は社会に深刻なひずみをひき起こし、暗黒の底辺、「日の当らぬ場所」をつくり出して行った。暗黒からの声を代弁し、物質ではなく精神の世界で、それをすくいあげて行こうとした人たちのなかに、多くの佐幕派の子弟を私たちは見出すのである。彼らがまさにその暗い底辺を生きて行かざるを得なかったからである。しかし、同じように底辺にあっても、士族（没落士族・佐幕派）以外の平民には、そのうめきの代弁者、精神的革命を目ざすべく立ちあがる人間が多く見られぬという事実、また日本の近代文学の成立を考える場合に、見のがしがたい

ところで、実はそのことからこの章をはじめるはずなのだが、愛山ら佐幕派の子弟が平民と同じく、いやそれ以上の辛酸をなめざるを得なかったということがまず重要なことなのである。

薩長藩閥体制のもとに呻吟せねばならなかった旧幕臣・佐幕派、その子弟の悲惨は筆舌につくしがたいものがあり、八百万石といわれる將軍家が七十万石に減封、駿府（静岡）に移されたとき、多くの幕臣は静岡に移住して行ったがほとんど無禄同様となり、百石の天文方の子愛山も静岡で窮乏の生活を余儀なくされた。その落魄ぶりは三千石の旗本の姫君が夜鷹に転落するほどのものだったといわれ、それらを見聞・体験した愛山は、北村透谷も激賞した「人生」（明二六）なる小説で描こうと試み、そのあまりの暗黒・無惨なために、ついに途中で筆を投ずるに至っている。立身出世コースからはみ出ることを運命づけられた青年たちを、これから私たちは、文学者に、そして彼らが描く登場人物に、多く見出すことになるだろう。卑近な例では、本書でとり扱う範圍外になるけれども、江戸牛込の名主の子弟であった夏目漱石にして、その「坊っちゃん」（明三九）では、坊っちゃんも清も旧幕臣の出であり、山嵐は会津っぼ、うらなりも松山の士族というふうに、校長のたぬき、赤シャツら「日の当たる場所」にいる者に対し、「時代の陰」にある者の存在を強調しているということがある。だが、さらに重要なことは、「時代の陰」にあるということのみではなく、「時代の陰」にありながら、たんに時代・体制に対し、怨念をつのらせたり、世を斜に見たりというような地点にとどまることなく、「眼を事業と功利の外に放つて日本の精神的革命に就きて前途の光を望みつつ」あったという事実である。「時代を批評し、時代と戦はん」（同・愛山）としたという

ところに注目しなければならない。

「時代の陰」と精神的革命　さきにも少しふれたが、「時代の陰」と言っても、薩長派士族と佐幕派士族——平民と士族——族との問題に過ぎぬではないか、戦勝・戦敗と言っても、たかが戊辰戦争

ではないか、山路愛山は佐幕派という地点から一步も出ていない、こういった批判も予想されよう。だが、「時代の陰」といえば、ふつうなら当然はいるべき、大多数の底辺の農民・町人たち——平民がはいっていないのは、愛山が平民など念頭にない武士の子弟であつたからだ、というふうには直ちに言うことはできない。くわしくふれる余裕はないが、愛山はそのような歴史家ではさらさらなかつた。

事実として、精神的革命を目ざした青年たちが佐幕派の士族の子弟であり、平民ではなかつたということに注目せねばなるまい。尾崎紅葉などがその短篇でこのんでとりあげた没落士族の生活は、娘を売らねばならぬほどの惨憺たるもので、それは『破戒』（明三九）の敬之進一家にまで及ぶほどのものであつたが、その点から言えば、彼ら没落士族もすでに底辺にうごめく平民にはかならなかつたはずである。けれども、そういうどん底に落ちて、平民以下にさえなりながらも、士族はその意識において平民たり得なかつた、すくなくとも平民たり得なかつた士族やその子弟が存在したということが出てくるのである。私はいま、「時代の陰」から日本近代文学を問ひなおしたいという気持を抱いているわけだが、この問いかけは、色川大吉氏『明治精神史』『明治の文化』らによって積極的に進められてきている、底辺の視座からする明治の文化・思想への問いかけと同様の意味を

持つべきものである。そして、その底辺に、精神的革命を目ざした佐幕派の子弟もふくまれてくるが、精神的革命を目ざすか、目ざさぬかを基準とすれば、薩長派はむろんのこと、平民の方も、すらりとそこにはいってこないという問題が出てくる。

むろん平民が精神的革命をまったく意識していなかったと言えどもあやまりになるし、最近、安丸良夫氏（『日本の近代化と民衆思想』）や色川氏が、通俗道德実現の過程において民衆がいかに自己の思想を形成して行ったかという視角から、民衆思想の新しい評価をうち出している点も見落とすことはできない。出自からだけで思想は規定できるものではなく、教養・修養・体験の要素も大きいのだが、しかし、ここで愛山の言う文脈での「精神的革命」には、一般的に言って平民はふくまれず、主として佐幕派の子弟であったということが言えるのである。このことは「文学」を考える上で大きな意味を持つ。一方では、平民は「精神的革命」を容易に目ざし得なかったが故に、それだけ自己の内部の欲望や喜怒哀楽にのみ執し得たということも逆に出てこよう。ここには、幕藩封建体制下における武士と平民との精神志向の相違がかけを落としているのであり、それはむろん文学の問題としても、いや、文学の問題であるがゆえに、かなり顕著にあらわれているはずのものである。

ふたつの「文学」

すでに多くの指摘があるように、近世にはふたつの「文学」が存在していた。

中村幸彦氏は「近世人の意識では、階級とも称すべき二つの群に、全文学作品はわけられていた」（『近世儒者の文学観』）として、一は伝統的な文学——和歌和文、漢詩漢文の群、

他は近世に体をなした俳諧・歌舞伎・浄瑠璃や仮名草子・浮世草子以下の近世小説をふくむ新様式の群というふうに大別し、雅文学と俗文学、晴^{はら}の文学と褻^けの文学、あるいは第一文芸と第二文芸とも称してよからうかとしている。これを野口武彦氏（『近世朱子学における文学の概念』のごとく、ふたつの文学というよりはむしろ、文学と非文学であったというふうに言っても同じであるが、近世においては前者は文学であつても後者は文学とされてはいなかったということからすれば、そこには明瞭に価値意識があつたことがわかる。上の文学と下の文学、武士の文学と町人の文学という称呼もそれにかかわっている。

上の文学

近世にあつては、「文学」とは究極には道にかかわるものであり、朱子学によつて代表される漢学（儒学）がその根本をなしていたということが言える。

道あれば文あり、道あらざれば文あらず。文と道とは理同じくして事異なり。道は文の本なり。文は道の末なり。末は少にして本は大なり。故に能く固し。

（『羅山先生文集』六六 原漢文。中村幸彦「近世儒者の文学観」による）

近世の最高学府たる昌平黌の礎となつた林羅山の文学観であるが、「道とは朱子学で言う人倫まゝに行うべきの理即ち道德をさし、文とは文章博学の意、この文の中には儒学からまだ独立を許されなかつた今日の意味の文学も含まれる」（中村）。「文学」は何よりも道の実践のためにあり、人間いかに生くべきかの根本課題と結びついている。「文章は経国の大業」といい、修身齐家治国平天下を目ざすものとするのも同様である。むしろ、いかなる道の実現かによつて「文学」の意味する

ものはまったく異なつてこようが、文学概念としては、次のような愛山文にうかがわれるものとか
わらないはずである。

文学は我が一生をくらす為なり 孔子曰学也世禄在其中 我日本の精神的改革の為に我一生を
献ぐるは我が天職なり造次も神を忘るべからず安逸を計るは是志士のせざる所なり キリストは
十字架にかゝり玉へり 勇士不忘其之三也 貨色の二、是最大誘惑一人の良妻を得は足れり仮初に
も富貴権勢を慕ひ申間敷事

明治廿四年四月廿一日思ふことありて記しぬ 愛山生

右は愛山が残した手記帳のなかにある「我が一生の計」と題された断片だが（大久保利謙編『山路
愛山集』所載）、文学が愛山にとってどのようなものであったかはつきりうかがわれる。「学也世禄
在其中」とは、『論語』（巻第八衛靈公第十五）の一節で、「子曰、君子謀道、不謀食、耕也鋤在其中矣、
学也禄在其中矣、君子憂道、不憂貧」の文脈におきなおしてみてもなく、君子は道を求めても
食を求めようとはせず、学んでいれば禄は自然に得られるのだという、物質よりは精神・道を、と
いう姿勢があり、さきの精神的革命（改革）の道が愛山一生の仕事としてここに決意されているこ
とが知れる。文中の「文学」「学」は同義に用いられており、「志士」「勇士」も儒学的・武士的で
あるが、「孔子」と「キリスト」が同時に引かれてるように、儒学の「文学」にキリスト教が結
びつき、「我日本の精神的改革の為に我一生を献ぐるは我が天職」という自覚が生まれている点
が注意される。近世における上の文学の意識は近代文学にこのようなかたちで受け継がれているの

である。むろん、何よりも「時代の陰」にある意識、そこにとどまる意識の存在が重要で、「仮初にも富貴権勢を慕ひ申間敷事」という強い自戒を見落としてはならない。

下の文学

こういう愛山に見られるような「文学」像がそのまま日本近代文学に重なるものでないことは、手帳に「文学は我が一生をくらす為なり」と書きつけた愛山が、その二年後には自己を非文学党と宣言するに至ることで明らかなだし、北村透谷との間に有名な人生相渉論争が生じるということによっても知られよう。近世儒学の文学像からして当然非文学と見なすべき文学が、逆に支配的になるような時代がくるとすれば、儒学的文学、それがキリスト教と結びついていたとしても、そのような文学像を抱く者は、逆に非文学党たることを主張せざるを得なくなるということがあるだろう。愛山の場合はそれに近いのだが、はたして明治二十年代に、近世において非文学とみなされていた「文学」が、文学として復活しているようなことがあったのか、どうか。そのままの復活などあり得ないことだが、これは打ち消して済ませることのできぬ重要な問題であり、実は本書の全体がこれらの問題にかかわっているので、この章では、別な角度からの一例をあげるにとどめよう。

『明烏後之正夢』

ここに明治十九年三月翻刻御届・明治二十年一月再版御届・著作者故為永春水・原版人不詳・翻刻出版人東京府平民鈴木金次郎なる奥付を持つ『明烏後之正夢全』という明治ボール紙表紙の小型本が多いが、為永春水の処女作で文政四年（一八二二）から刊行は、こうしたボール紙表紙の小型本が多いが、為永春水の処女作で文政四年（一八二二）から刊行